奨励賞

障害者がもっと普通の生活を送れる環境を障害者自身の手で実現する

特定非営利活動法人 アス・ライフサポート

企業プロフィール

特定非営利活動法人 アス・ライフサポート
代表者：理事長　藤田英二
〒753-0033
山口県山口市大市町3-12
TEL 083-934-1294
FAX 083-934-1294

◆業種および主な事業内容
福祉事業（デイサービスセンターおよびヘルパーステーション）

◆従業員数
38名（平成18年2月現在）うち障害者4名
＜内訳＞
肢体不自由者4名（うち重度3名）

◆事業所の概要と障害者雇用の経緯

サラリーマンで車椅子マラソンの選手だった藤田英二理事長が10名の賛同者とともに、チャレンジド（障害者）自らが希望するような支援体制づくりを実現したいとの思いから平成15年10月に設立した法人が特定非営利法人アス・ライフサポート。

「アス」とは、英語の「US（私たち）」と、明日（あした）の2つの意味が込められ、つまり、「私たちの未来の明るい生活支援活動」をしていきたいとの願いから出発している。障害があっても、積極的に地域社会に出ていくことがチャレンジドの自立のために必要不可欠である。

チャレンジドの自立をチャレンジド自らが支援するために企画・運営する団体として誕生したアス・ライフサポートは、平成16年8月に山口市の中心街に障害者・高齢者デイサービスセンターと訪問介護事業を開業した。

障害者デイサービスセンターの運営にあたり、運営する側が同じ目線で見ることができるように障害者雇用を開始し、利用者の立場に立ったサービスの向上に努め、大きな支持を得ている。

障害のある職員が対応することで利用者の信頼を獲得

サラリーマンとパラリンピックの選手の経験を生かし、障害者の自立支援を始める

藤田理事長は、ポリオ（小児マヒ）のため小学校低学年から下肢が不自由になり、リハビリによって歩装具を付ければ歩行できるまでになったが、普段は車椅子を使用している。学校卒業後はカーディーラーに就職するが、32歳ごろから車椅子マラソンに凝り出す。そして、38歳のころには日本記録を持つほどの実力選手になり、2000年シドニーで開かれたパラリンピックには、日本代表として800mと5,000mの長距離レース、1,600mリレーに出場した経験がある。

障害のあるサラリーマンであるとともにスポーツマンであった藤田さんは、同時に長年にわたってボランティアとして重度の障害者の外出を支援する活動を続けてきた。しかし、このボランティアとしての活動に次第に限界を感じ始めていた。

ちょうどそのころ、勤めていた会社が営業権を譲渡するような事態となる。これを、本来やりたいことをやるために背中を押されたと理解した藤田さんは、この機会に退職を決意する。

ショッピングや自然散策を楽しめる中心商店街にデイサービスセンターをオープン

そして、平成15年10月に10名の賛同者とともに設立したのが特定非営利活動法人アス・ライフサポートである。アス・ライフサポートは、チャレンジド（障害者）や高齢者が地域の中で普通の生き生きとした暮らしをするための生活環境をつくること、スポーツや芸術などの活動を通じてチャレンジドの持つ隠された力・価値が発現するような場を提供することを目的としている。

その後、平成16年8月に山口市の中心商店街に障害者・高齢者デイサービスセンターと訪問介護事業を開業する。中心街で開業した理由は、障害者がもっと気楽にショッピングや散策を楽しめるように、自然に地域社会との接点が生まれる環境を作りたかったためである。

1階には、絵画や創作活動作品などの展示を行うギャラリーと浴室、2階には、ボッチャ※、デジタルシューティング、卓球などの設備を備えた機能訓練室（60.9m²）、日常生活訓練室および社会適応訓練室、ならびに3階には、ゆったりとくつろげる身障者デイルームおよび高齢者デイルームが設置されている。

同じ目線で手助けできる障害者を職員に雇用

このデイサービスセンターでは、管理者の木村重美さんをはじめ職員として4名の障害者を雇用している。木村さんは以前はデイサービスセンターの利用者だったこともあり、その経験を生かして、利用者と同じ目線でデイサービスの企画・運営に当たっている。

こうした障害のある職員が対応することによって、何よりも利用者が安心して利用してくれるはずである。経営戦略的な観点から出発した障害者の雇用であるが、実際に利用者の信頼を得て、利用者獲得の面でも大いに貢献しているという。

しかしながら、木村重美さんは小児マヒによる両上下肢機能障害のため電動車椅子を使用、野稲光美さんは脊髄損傷による両下肢機能全廃のため車椅子を使用しており、職員としての能力を十分に発揮してもらうには、施設を大幅に改善する必要があった。

以下、問題点ごとに対応策について具体的に記述する。

作品展を開催中のギャラリー

※ボッチャ（BOCCIA）…テニスボールほどの大きなボールを用い、最初に投げた的ボールをめがけて2チームの各プレイヤーがボールを投げ、いかにして的ボールの近くに止めるかを競う競技。パラリンピック大会の競技種目にも採用されている。

問題点と対応策

1

木村さんはエントランスホールや2階事務室出入口のドアを自力で開けることができなかった。

>> それぞれのドアを自力で開けられるように引き戸に改造した。

2

エレベーターがないため、木村さんも野稲さんも職員の手助けなしで2階や3階に移動できなかった。

>> エレベーターを設置することで移動が容易になり、仕事の能率も利用者の利便性も向上した。

▶詳細は60Pでクローズアップ

3

木村さんは通常の車椅子対応のトイレでは自力で使用できなかった。

>> 2階のトイレを、床の高さと便座の高さを同じにすることで、自力で使用できるようにした。

4

野稲さんは、障害のためトイレの使用時間が1時間もかかり、利用者にとっても不都合があった。

>> 3階に車椅子対応のトイレを増設した。

充実した設備を備えた機能訓練室やデイルームで楽しみながらくつろぐ利用者たち

2階の機能訓練室でスポーツやカラオケを楽しむのもよし、3階のデイルームでパソコンやゲーム、楽器を楽しみながら、のんびりくつろぐのもよし。利用者たちはそれぞれ同じ目線で手助けする職員たちと、デイサービスセンターで1日を過ごします。

広々とした高齢者デイルーム

機能訓練室で
カラオケに興じる利用者たち

身障者デイルームでは
パソコンやゲームができる

1 ドアを引き戸に改造 電動車椅子での移動を可能に

木村さんは、エントランスホール出入口と2階事務室出入口のドアを電動車椅子に乗ったまま自力で開けることができず、他の職員の力を借りなくてはならなかった。

これを現在の引き戸に改造したことにより、自分で開閉し、移動することが可能になった。このため、木村さんだけでなく、手を貸す職員を含め仕事の効率がアップした。

2階事務室の引き戸を開けて、中に入る木村さん

ここが聞きたい！ 雇用の場はもっと広がる！

障害者でもやればできるんだとの実感を味わってほしい

藤田英二理事長

私自身小さいときから障害がありましたが、ビジネスマンやスポーツマンとして自分なりに努力することで、やればできるんだとの実感を味わうことができました。そんな実感を重度の障害者の方にもぜひ味わってほしいとの思いから、アス・ライフサポートを設立することにしました。

福祉の世界はともすると、上から支援するという形になりがちです。その点、木村重美さんや野稲光美さんのような重度の障害者を雇用し、必要な戦力として活用することによって、同じ障害者同士として手助けするようなサービスができるようになっていると思います。

スポーツの世界でも同じ競技をやってきた者同士だけが分かり合える気持ちがあるように、障害のある者同士だけが通じ合える、微妙なニュアンスがあると思うのです。

障害のある人が管理者や一般職員としてデイサービスの企画・運営に携わっているからこそできるサービスもあるし、悩みや気になることも訴えやすいということもあるでしょう。職員の採用にあたっては、障害のあるなしにかかわらず、一人一芸を持っていることを条件にしていますが、その点でも職員はそれぞれ個性があり、利用者からも皆評判がよいですよ。

今後重点を置いてやっていきたいのは、かなり重度の障害者でもできるボッチャという競技を普及させることです。やっと山口県ボッチャ協会を立ち上げたところですが、講習会や競技会を県内各地で開催し、ボッチャの普及を通じて障害者の自立をサポートする活動を展開していきたいと考えています。

ボッチャのボールでルールを説明する藤田理事長

藤田理事長がシドニーのパラリンピックに出場したときに使用した競技用の車椅子と数々の賞状など

クローズアップ

2 2階事務室や3階のデイルーム（作業室）などへの移動のため、エレベーターを設置

当初、木村さんも野稲さんも事務室や機能訓練室がある2階、さらにデイルーム（作業室）がある3階に移動するには、その都度職員に抱えてもらって階段を上がらなくてはならなかった。

健常者の職員に気兼ねなく対等な立場で仕事をするには、自力で移動できるエレベーターが必要不可欠であった。また、障害者や高齢者の利用者がスムーズに移動するためにも必要な設備であった。

エレベーターの設置により、障害のある職員ばかりでなく一般の職員の仕事の効率も大幅に向上し、さらに利用者の利便性も高まることにつながった。

車椅子用に正面に鏡が付いたエレベーター

3 便座と床の高さを同じにし、重度の障害者も使いやすいトイレに

木村さんは通常の車椅子対応のトイレでは、職員の手を借りなくては便座に移ることができなかった。そこで、洋式トイレの便座の高さと床の高さを同じにすることで、電動車椅子から便座の高さの床に乗り移り、そのまま移動して便座に移れるようにすることで、1人でトイレを使用できるようになった。

これにより、木村さん同様の重度の肢体不自由者にとっても便利で使いやすいトイレになった。

便座と同じ高さに床を上げた2階のトイレ

床に乗り移ろうとする木村さん

4 3階に車椅子対応のトイレを増設

野稲さんは脊髄損傷の影響によりトイレの使用時間が1時間ほど必要である。1階にはオストメイト（人工肛門）対応の利用者用トイレが設置されているが、これを長時間使用すると、利用者に不都合なため、3階に車椅子対応のトイレを増設した。

これにより、気兼ねなく野稲さんがトイレを使用できるようになっただけでなく、利用者の利便性も向上した。

3階に増設した広々とした車椅子対応のトイレ

肢体不自由者からみた「働きやすい職場」とは

管理者の木村重美さん（平成16年入社）

◆障害者としての経験を生かして、若い障害者にアドバイスをしたくて、この仕事に就きました

小児マヒのため幼いときから手足がずっと不自由でした。これまで通常勤務での仕事に就いたことはありませんが、20年ほど前から絵の勉強をしてきました。山口県の美術団体に所属して、公募展などにも応募するなどの活動をしてきました。

障害者として1人で生活して20年ほどになり、40歳も超えましたので、何かこの経験を生かして社会のために役に立つことをしたかったのです。施設から出たいと希望している障害者の方も多いと思うのですが、できればそんな若い障害者のアドバイザー的な仕事がしたいと考えていました。

そんなとき、ハローワークからデイサービスセンターを開業しようとしているアス・ライフサポートを紹介されました。非常にタイミングがよかったと思いますね。障害者のためにアドバイスする仕事といっても、それほどありませんからね。

エレベーターや2階の特殊なトイレなど、私のために働きやすい環境を整備してもらい、本当に感謝しています。この仕事に就いてよかった思う点は多々あります。例えば、言語障害がある利用者さんから新しい車椅子に替えたいなどと相談を受けたときには、実際に長年使っている立場からアドバイスするだけでなく、代わって車椅子の業者さんと交渉することもあります。口は達者なほうですので、そのようなときには感謝されますね。

今後は、商店街を中心にもっと外部にも出かけていって、障害者が気軽に立ち寄れるような環境づくりをしていくためのお手伝いをしたいと考えています。

3階のデイルームに飾られている自作の絵画について説明する木村さん

帰宅する利用者を見送る木村さん